「超ファシリテーション力」

著者：平石　直之
出版：アスコム
発行：2021年11月12日



ここ数年の間に、会議や打ち合わせなどの場で進行役を務めることが増えてきた。これまでの活動や経験を評価されての任務であると素直に喜びたいが、そもそも私にはその経験があるわけではなく、オリジナルの進行手法を確立しているわけでもない。とりあえず、これまでの進行役の諸先輩方や前任者の方々の手法を思い返しつつ、自分なりにアレンジしながら行き当たりばったりでこれまでなんとかこなしてきた。しかしながら、会議のたびに、ふらふらと低空飛行を繰り返し、何とか軟着陸させているばかりでは、参加者の精神的負担が大きいであろう。なにより私自身の精神的負担が軽減されないし、成長にもつながらない。そこで、進行役つまりファシリテーターというものについてきちんと勉強しようと一念発起し、本書を手に取った。

本書の著者である平石直之氏は、テレビ朝日のアナウンサーである。著者は、入社後、キャスターからローカルレポーター、海外勤務など様々な現場を経験し、2019年よりABEMAの「ABEMA Prime」という番組の進行を務めている。ABEMAとは、サイバーエージェントとテレビ朝日が共同出資する株式会社ABEMATVが運営するインターネットテレビ局であり、ライブストリーミング放送とビデオオンデマンド放送を行っている。また、「ABEMA Prime」（以下、アベプラ）とは、ABEMAで平日の夜に２時間にわたって生配信されており、普段地上波放送のテレビを視聴しない若者向けに制作された報道番組である。番組では、個性的なゲストを招き、ゲスト同士で討論を通じてニュースを解説してくスタイルを取っている。時に、ゲスト同士の個性がぶつかり合い、言い争いに発展することも、熱くなったゲストが持ち時間を超えて語り続けてしまうこともあるが、これらはこの番組の大きく特徴づける要素でもある。また、配信中もtwitterなどから投稿される視聴者のコメントを取り上げ、これらコメントに対してゲストがリアルタイムに受け答えることも番組の特徴のひとつである。著者は、次々に寄せられるコメ

ントに目を配りつつ、ゲストに発言を促し、ゲストの言い争いや暴走を止めるなど、八面六臂の活躍を見せることから、アベプラの猛獣使いと呼ばれており、ファシリテーターとして非常に高く評価されている。本著の「はじめに」には「もともと私は自分から場を仕切っていくタイプの人間ではありません。」と書いてあるが、そのような著者が非常に高い評価を得るに至った、これまでに身に付けたあらゆるノウハウを紹介しているのが本書になる。

本書は、全４章で構成されている。第１章と第２章では、ファシリテーターの心得と話し合いを円滑に進めるコツをQ&A形式で説明している。第３章では、ファシリテーションの準備の重要性について解説し、著者が実践している準備方法を紹介している。第４章では、著者が良く使うフレーズをキラーフレーズとしてFAQ形式で紹介している。

本書の冒頭には、「平石流ファシリテーションの極意」として、８ページで本書の要点が端的にまとめられている。まずはこの極意を常に頭の片隅に残しておきつつ、読み進めることを推奨する。本書は徹頭徹尾、この極意から離れることはなく、この極意がいかに重要であるかがよくわかる。第１章と第２章のQ&A形式のテーマはそれぞれ独立しており、見開き４ページ程度にまとめられている。一気に通して読んでしまうと、繰り返される部分があり、やや冗長的に感じられるが、そもそもQ&A形式であるのでこれは致し方ないといえよう。むしろ頻繁な乗り換えを伴う通勤の途中に本を読む私のような読者には、ひとつのテーマごとに読み進められるので非常に頭に入りやすく、また会議前にさっと読み返すにも適した形式といえる。また、キラーフレーズはとてもよく練られていて、大変参考になる。本書を読む前に参加していた会議で、当時の進行役の方が使っておられ、私も上手な言い回しだなと感心したフレーズが含まれていた。当時は漠然と感心したのだが、本書ではそのフレーズがどのように効果的であるのかについて詳しく解説されており、論理的に理解することができた。他のフレーズについても同様で、経験に裏打ちされた具体的なアドバイスを受けたかのような感覚を得た。

本著は、著者のテレビ番組でのファシリテーターとしての経験に基づいていることから、すぐに役立つテクニックだけでなく、多くの気付きとアドバイスを得ることができる良著である。普段の会議や打ち合わせの進行にも十分に役立つが、パネルディスカッションや討論会の進行など、ファシリテーターとしての役割を控える方々にとっては最高の教科書である。

起業教育研究会　企画委員
大阪商業大学　准教授
北室　康一